「On your mark, set.」

スターティングブロックに足をかけ、周囲の静かさがトラック全体を包み込む。心拍数が一気に上がって自分の荒い息遣いだけが耳に聞こえてくる。ピストルが鳴るまでのわずか数秒間、全神経が集中して周りの景色がすーっと消えていくような不思議な感覚がある。

僕は普段、陸上部で100メートルや200メートル、そしてリレーの短距離選手としても走っている。ほんの一瞬の判断が勝敗を分け、息が詰まるような緊張感と向き合うトラックの上こそが僕にとっての「真剣勝負」の場所だった。

しかし、夕木春央さんの『方舟』という小説を読み終えた今、自分がトラックの上で感じていた緊張感なんて、命の危機がかかった人間のプレッシャーに比べたら全く甘いものだと感じた。この本で描かれているのは、スポーツのドキドキ感をはるかに超えた残酷で恐ろしい「タイムリミット」と、人間の究極

の選択だった。

物語の内容は、山奥の地下深くに作られた不気味な巨大建物「方舟」。そこに閉じ込められた主人公たちの場所で地震が起き、出口が岩で塞がれてしまう。さらに困ったことに、地下水がどんどん流れ込んできて、水没するまでのタイムリミットが迫ってくる。脱出するためには、誰か一人が犠牲になって重い岩を動かす仕掛けを操作しなくてはいけない。しかも、そんな絶望的な状況の中で殺人事件まで起きてしまうのだ。生き残るためには、犯人を突き止めて、その人にお願いして「犠牲者」になってもらわなければならないという悪夢みたいな条件が突きつけられる。

僕が特に引き込まれたのは、追い詰められた登場人物たちのリアルな気持ちの動きだ。短距離走でも、レース後半の苦しい場面やスタートの瞬間、焦りやプレッシャーから思わぬミスをすることがある。100メートルの途中で力んで走りの形が崩れてしまったり、

2００メートルのコーナーで横の選手に並ばれて焦って焦って力んでしまったりすることもある。当に難しい。

焦っている時ほど、冷静に判断することは本に同じだと思う。どんどん増えていく水、確実に減っていく時間という「タイムリミット」の恐怖の中で、彼らは「誰を生かして、誰を犠牲にするか」という恐ろしい決断を迫られる。「仲間を助けたい」という優しい気持ち や「自分が死にたくない」という本能的な恐怖が激しくぶつかり合う様子は、一瞬の判断と戦う僕たちアスリートの気持ちとも重なっているように感じ、胸が苦しくなるくらいのリアルさが伝わってきた。

また、リレーをやっている僕にとって、作品の中で描かれる「人間関係が壊れていく様子」は特に胸に刺さるものがあった。リレーという種目は、仲間への絶対的な「信頼」が ないとうまくいかない。前を走る走者は、後

ろからくる仲間を100パーセント信じて、

一切振り返らずに全速力で前に飛び出す。バ

トンゾーンという限られた空間で、お互いの

スピードとタイミングを信じ切るからこそ、

一人では絶対に出せないタイムが生まれる。

そこには強い絆がある。

しかし、「方舟」の世界で突きつけられる

のは、そんな信頼関係をあっさり壊してしま

うような「人間のわがまま」だった。「みん

なで助かろう」と声をかけ合っている裏側で、

本当は誰もが「自分だけは絶対に助かりたい」

という本音を抱えている。誰か一人を犠牲に

しなくてはならないという極限の状況は、そ

れまでの友情や絆を一瞬で引き裂いていく。

仲間と協力してバトンをつないできた僕にと

って、極限状態で人間が見せる「自分が生き

残りたい」という必死な姿は、怖くもあり、

深く考えさせられるテーマだった。

そして、この物語の本当の恐ろしさはラス

トシーンにあった。この作品の最後の真相は、

僕が今まで読んできたどんな本とも違っていて、言葉を失うくらいの衝撃だった。読み終えた瞬間、「自分がいかに勝手な思い込みで、ストーリーを読んでいたか」を思い知らされ、ぞっとした。

陸上でも、「自分はこれくらい走れるだろう」などという油断や思い込みは命取りになる。目の前で起きていることを冷静に見て、予想外のトラブルに対応する力こそが勝利には欠かせない。『方舟』の結末は、人間がいかに「自分の見たいことしか見ていないか」という弱さを教えてくれた。

この本を通して僕は、追い詰められた人間の弱さと怖さ、そして重大な決断をすることの重さを学んだ。僕たちがトラックで追いかけるのはコンマ一秒のタイムであって、誰かの命ではない。その恵まれた環境に感謝しながら、これからの部活動でもどんなプレッシャーにも負けず、冷静に自分の走りを見つめ直せる強さを持ちたいと思う。